



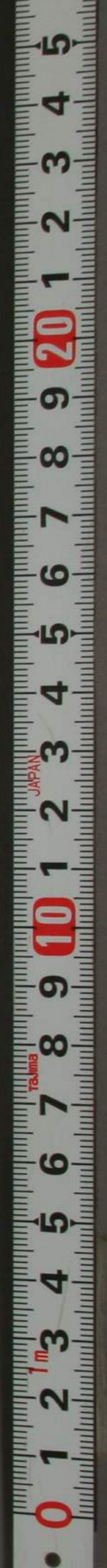
里見八犬傳

拾四編

卷廿九



709
77



曲言子馬琴今著

明治二十六年十月九日購求

第十四輯

八犬傳

東京名山閣版

遠門 18
號 709
卷 77



南總里見八犬傳第九輯卷之二十九箇端或説贅辨
 嚮友人生世のいへり。或云本傳第九十九回素藤鬼語とぞ段より第百四
 十九回一休画虎を度する段まで事々物々怪談鬼話多し稀に且上十二地
 藏の利益あり下小薬師十二神の靈異あり又前小狸見の怪談あり後小画虎の
 怪談あり其事都て重復を免れ互に相犯さむといへども大凡看官の怪談を
 好むと好むとあり其怪談と好む者必飽く心地まへといへり。この言當れりやと
 問れり予答ていへり。不不不然とぞ唐山大筆多稗史の縁て。是を思ふべ。彼
 鬼話怪談の言は獨西遊記の事を壁水滸傳の如く又是怪談とぞ。
 趣向を建ち見るべし。始小石碣一百十箇の魔鬼君を走まするあり。又小石碣一百
 八箇の魔鬼君と治めて遂小宋朝の忠義士を做せり。彼が一部の大趣向作者の
 隱微あり在り。予嘗水滸傳の隱微發明評。且羅維真人公孫勝の仙術戴宗の神行樊瑞

八犬傳九輯卷之二十九

女學堂藏

高廉が幻術及九天玄女の靈驗真助皆是ヨク怪談不涉れり然と金聖
 歎が評小三國志演義を非一く水滸傳の毫も怪談をいへり矢ハ一と
 左まれ右もあれ本傳も亦始より鬼話怪談をのく趣向を建ち。豈帝九十九
 回以下のまゝあらんや。所云始は役行者の利益あり又伏姫腹を辟く。竟ハ八犬士
 出世の張本ある奇談あり是より後ヨク怪談不涉は者事比皆勸
 懲の意思のせしめたるに。就中地藏茶師の靈應利益の世の怪談不惑る婦
 幼及事と好む雅俗をいへて竊小覺さんと云。叮寧反覆して。終り。然
 るを怪談ヨヌーといふ右てもいまま覺る欲辨さるといひかひるるべし。抑怪談
 雅俗の差別あり不及る予が綴る怪談の事勸懲小あらざる者。あざとて
 世に在る所の怪談と相似て同トかざる。よく見る者予が言を俟ざるもあはか
 みの故小吾常小云五吾漫小物の本と綴り初より此小五十餘年を實の无益の

技あれども已の老煉に至りてのやまもく精くして十二分おせざるなり。然るも看官の
 只二分四分の二三の同好知音の評も六七分の上を必む其心を用ひ力を入る處
 精粗同トかなんべし。ある所近曾人あり。予が舊作の俊寛僧都嶋物語成
 評も。八犬傳を除くの外是を第一の佳作とまといへり。私言の。予の決して
 諾るるも。但予が諾るるの。十日の視る所大々同おるべし。人各優劣を
 其好憎不儘まる。必公論するもの。譽言らむ欲がる。ての人の情るれども。已が如く僻
 者の與言られて多く。恥くたのあり。不白なるあり。己と知ざりて。いづくぞよ人を知らん。或の
 砥破の美をを負むが為。光と階玉の争も欲し。或の瑣々。小鶏彼距を
 舉て力と封牛の比。比ま欲するが如く。是予が恥る所。友人又告いへく。或云本傳
 第百二十一回。八犬士稍全聚。俱安房。徵。里見の家臣あると。是宜く大
 團圓るべし。然と又金碗の姓氏の事と説出。京師の話說十八九回あり。十一回の

末より第百四
九回に至り
事と説く十數回は是始より
腹高き。然るに疣贅とせざるはよく思はる故
そあらぬ。そ何と云ふ八犬士俱く安房に到りて里見の家臣あるのみ。大江親兵衛を除くの外七犬士皆一介の功なる。是尸位素餐の人あるべし。犬士もかくの如くあり。可ららん乎。且京師の語説微り。俗に云田舎芝居に似て始より説く所東八州の事。過は然る。話説廣く。大部の物の本不足ざる所あり。壁言水滸傳の如は。七十回の後招安の事。及京師の語説あり。至る。一百八箇の魔君比皆よく變りて。宋の忠義士あり。備是等の事。七十回を局を結ぶ。彼二百八人も梁山泊嘯聚の強人の。何をどう勸懲せんや。是非由てこれを觀る。水滸百十回の羅貫中が一筆する疑ひ。然るに又彼金瑞の七十回以下を誣て續水滸傳とて。反く酷く誣り。他が如は。水滸の皮肉を知る。骨髓

ゆる者あり。然るに有人の臆断。本傳百二十一回を團圓させ。宜かむと云ひ。又彼金瑞が水滸七十回を強て結局ある。同日と論を。そも吾美意壽桑榆の暮春景に至るとして。看官きて本傳の結局をい。故のそありけし。予い。ねども。腹稿尚餘り。其遣捨。九輯下帙の下し。編十卷を分卷十。五冊未だ。稍大團圓に至る者あり。筆次。本輯卷の二十九。第百四十七回。大江仁が三関を破る。處の出像。画工諺。作者の稿本。違々。仁が馬上の敵の雜兵を研み捉。擲り。為体。画。第百二十七回。左右川の段の出像。仁が跪。兩。敵の雜兵を捉抗。處。又第百四十回の出像。仁が馬上の徳用を抗。抗。此。彼。重復。且。馬上の人。研。仁。相。取。看官必難。又。云。画。工。足。を。聊。改。作者。見。知。一。條。削。去。べし。

天保十年花月念八

曲亭主人識



南總里見八犬傳第九輯下帙之下乙號上套目錄

卷二十九

第四百十六回
白河山代四郎救小姐
談講谷親兵衛射大蟲

第四百十七回
紀二六月下逢真刺
親兵衛湖上破三關

第四百十八回
頓智之功從者妙利
奸詐之悔執權送還

第四百十九回
石藥師堂賢少年辨朝賞
東山銀閣老和尚醒驕君

第四百十回
照文捧二書還東藩
兩侯聽眾議寬京信

卷三十

卷三十 下

第四百十一回
七犬煉兵夢想行三使
定正連將水陸起大軍

第四百十二回
憲重憲儀聚兵同使
行包在村忠奸異諫

第四百十三回
毛野呈計八百八人
大聽命善巧方便

本輯下帙の下所云下套の乙號編の五卷迄の足金因十
卷の局を結ぶ。その内中巻の卅と卅四五は楮數の多るもの
贅で上下各二冊とを共計は十五冊之其十五冊の中五冊夙彫果る
先出せる右の第四百十三回以下も必續て出ると云看官亦復俟待
南總里見八犬傳第九輯下帙之下乙號上套目錄終

八犬傳九輯終三九

四

文選堂



ことわれ草のまき
 ちか買へ大津画
 の鬼のまき草の
 あり野乃花
 羊飼人

大杖入道徳
 物持

老松湖大夫
 惟一

根古下厚四郎
 鶴京

八代傳九郎卷三

五
七八

大津画



松柏如天
 子
 美人似春
 花

再出
 雪吹姫

秋篠將曹
 廣當

八代傳九郎卷三

大津画



虎とを射矢さすやのり
 けむ今もく野の石竹
 の花

一休和尚
 妙賢

義政公
 一休

八代轉山輯卷三十一

七六

文治堂



昔年同氣相求處
 今日同憂莫不憐

圓通

箕田馭蘭二
 圓通

根角谷中二

麗廉

廉吉

八代轉山輯卷三十一

文治堂



まみ河川をめぐりて後りやのくろ
世をくた橋の甘きけり著作堂

下河邊莊司
行包歸る

千代丸圖書助
豊俊

八代傳七郎卷三十一

七八



君醉甚多
言垣維有
耳壁垣維有

世智介
甘ちま

小オニ
NHS

ホリレ

八代傳七郎卷三十一

八代傳七郎卷三十一

前板第九輯下帙の下甲號五卷校閱送漏再訂抄録

○廿四の卷 九の長歌 何の更の夜を 下の更の誤り 同 七丁左 鍛冶子 冶の治の誤り

同 廿五丁 懲 懲の誤り 同 廿七丁 蛤 蛤の誤り 同 廿八丁 城塙 塙の誤り 同 廿九丁 夜叉 夜叉の誤り 同 三十丁 燕雀の南

○廿五の卷 一丁左 虫積 積の誤り ○廿六の卷 二丁右 夜叉 夜叉の誤り 同 三丁 画 画の誤り 同 四丁 燕雀の南

枝 雀の鶴を誤り 同 十八丁 城塙 塙の誤り 同 十九丁 画 画の誤り 同 二十丁 燕雀の南

同 廿二丁 骨格 骨格の誤り 同 廿三丁 供 供の誤り 同 廿四丁 餽鬼 餽鬼の誤り 同 廿五丁 見

○廿七の卷 五丁右 只虚々 只虚々の誤り 同 六丁 餽鬼 餽鬼の誤り 同 七丁 見

同 八丁 小榎大榎 榎の誤り 同 九丁 餽鬼 餽鬼の誤り 同 十丁 見

○廿八の卷 十九丁 優 優の誤り 同 二十丁 名 名の誤り 同 廿一丁 知 知の誤り 同 廿二丁 知

同 廿三丁 突戰 突戰の誤り 同 廿四丁 風 風の誤り 同 廿五丁 知 知の誤り 同 廿六丁 知

同 廿七丁 突戰 突戰の誤り 同 廿八丁 風 風の誤り 同 廿九丁 知 知の誤り 同 三十丁 知

南總里見八犬傳第九輯卷之二十九

東都 曲亭主人編次

第四百十回 白河山に代四郎小姐を救ふ

却説姥雪代四郎直塚紀三と商量を果る本日未牌左側は則大江親兵衛

伴の若黨奴隸との先阪本の方へといそがせて半遣の登時又代四郎紀三

談きや傳聞は那白河を暴虎の獨戸の鏢砲も及びてとふる我々那里

るも何をのよ防名裏小酒家大江腋子と入迹絶る富山の洞奥松の光陰送

系猛獸毒蛇の害をり伏姫神の擁護に依れ今尚我々神の冥助に依る

免れと思ふのよ小心せよ事あら折争何せん紀三ちて宣趣定小介

神の祐を空憑して器械持去疎忽は似も然いそ那虎を我對治の與る

護るをこれにては、小押棒と携て、其の準備せし這談の什麼と相譚、代四郎然と領く、隨即夥兵西三石の事、信々たるるを、汝達の檜の棒の宜きを六條たりと列卒繩と蕉火材と、買のて来よかと、詞急迫く、吩咐て、錢を齎して市に遣、其後途旅人を召て、代四郎の言、咱も東人大江殿の這地の御用果、れ身の暇を多て、明日歸路に赴く、是は不も、我們的、這、噫、昏より、那果、参りて、手伴、立され、既ふと、餘波、ふる、夕饌の外、腰餉と、人別、準備せよ、の、美を、憑むと、宣示あり、其、羊帳を、且、同く、月、屬の、房錢を、還、る、と、ま、程、紀、三、と、五、條、客、店、に、還、る、去、り、物、整、々、又、来、る、と、と、遠、く、歩、ぬ、け、の、左、右、を、程、下、晡、ふ、る、時、候、那、西、三、個、の、夥、兵、の、東、西、皆、買、合、々、か、の、来、り、れ、俱、々、饌、と、喫、果、々、各、准、備、の、腰、餉、を、受、合、ふ、紀、三、が、分、足、ら、ず、と、思、ふ、も、店、小、二、伴、當、們、が、先、を、と、り、と、知、れ、紀、三、を、加、さ、も、尚、と、の、盒、子、に、有、餘、り、る、當、代、四、郎、の、五、個、の、夥、兵、向、て、曩、小、親、兵、衛、が、遠、慮、あ、る、と、紀、三、を、悄、地、に、留、め、別、店、に、在、

あ、ま、の、支、の、顛、末、と、耳、先、告、げ、の、夥、兵、們、の、筆、で、覺、得、く、且、感、且、歡、び、と、憑、く、思、は、け、の、小、程、の、直、塚、紀、三、と、約、装、初、の、如、く、肱、甲、脛、着、小、身、を、探、め、兩、刀、を、腰、に、さ、し、五、條、の、歇、店、も、来、り、れ、代、四、郎、並、小、親、兵、五、名、身、装、し、て、在、り、川、風、寒、に、點、燭、時、候、代、四、郎、們、の、逆、旅、主、人、不、告、別、と、立、去、り、兩、個、の、夥、兵、と、兩、箇、の、甲、曹、權、を、分、ち、各、是、を、馳、い、又、兩、個、の、夥、兵、と、蕉、火、材、と、言、ふ、盒、子、と、袱、子、裏、に、馳、り、て、代、四、郎、首、を、み、み、く、捍、棒、を、合、さ、り、る、紀、三、と、親、兵、衛、の、鎗、を、受、合、々、肩、に、し、又、只、一、個、の、夥、兵、每、行、裏、に、搭、駝、し、獨、代、四、郎、の、老、人、甲、斐、茶、背、輕、く、と、笑、ひ、け、り、信、而、這、人、の、悄、地、に、三、條、の、大、橋、を、ら、り、渡、り、て、河、原、の、守、屋、を、外、見、ら、既、而、白、河、の、山、路、を、登、る、程、小、宵、の、尚、二、更、不、過、ら、り、け、り、是、より、大、家、由、断、せ、ら、れ、く、蕉、火、を、相、照、し、疾、親、兵、衛、小、逢、々、思、へ、と、不、知、案、内、の、太、山、路、の、而、野、干、玉、の、烏、夜、を、れ、或、は、年、々、樹、枝、不、透、り、或、は、又、斫、る、依、不、岷、々、と、積、れ、る、石、原、障、り、と、去、り、更、を、路、を、路、ふ、り、迷、ひ、憶、き、も、夜、の、深、

鮮曉の月かきけの今も丑とあわんぞんと思し時候鈍甲夜過りたる麓より十町
 許這方より敗黨頭からあつ先立赤糸一個の親兵が之を滾びて吐嗟と叫んで代四郎紀二
 六自餘の親兵もあつし麻と藪をたがひ先蕉火を抗て四下を見る鮮血許流れ横り
 地圖の界を做せしむる前向の僧あり一個の腕を喪ひ一個の隻脚を断離られて死
 活知れず在り且其鮮血印する獸の足跡の最大なる三四有ける原来這僧は那
 最虎の喫れんと大家猜と又驚弁が中代四郎と紀二六を又火を抗て這僧を執と
 打相るふあも那左右川の上で認りて徳用之堅削れ許り俱小丸弾して噫無斬や
 這惡僧も奸詐毒悪る天罰徳をのりや罵り親兵もあつしと吸任りて這
 僧も如此とて忍破戒の崖路告げ大家嗟嘆し夜起して猶よ見ふ徳用の
 堅削も脚も不具ふも死の果も呼吸もとて依小衝放ちく血染る我指を他
 袖も拭ふ程代四郎の遠く紀二六を見ても各各を疲勞し一人一垂時這里で

鶴んとく半分朽る階おとす隻脚を踏蹴くうち陟えとあつ折るれ這堂内最輝
 娟も一個の少女の口布裏と銜られて両も甘結粗らるが氣絶やれ頭髪乱
 らく俯る儘の息もせ代四郎是を驚きぞ陟り果ぞ退れ又紀二六徳と告げ大家
 怪と兼する蕉火振照り齊一堂内入り一人件の少婦人を徐被起させ食俱
 する這女子年歳二八許や。ヨクヨク美人人其雲鬘の長く教香する其衣服の妙
 京様。實は是市井庸る女兒の似せ登時紀二六と代四郎とあつて豊何と相ひ
 け小可灰の聞るとあり政元主の養女雪吹姫と喚ぶの則是今出川殿親の妾腹
 る所を京北政元養ひ令て鍾愛を今茲年歳二八許よりゆくと人の心る憶ふ
 あも那姫上るを惡僧もが竊合りて這地方へおくる時那最虎の撞見て事
 及ぶるあんとこの代四郎領け介ら先這妙を喚活てを問ふけれそ其布裏と
 郷方索と俱ふも多鮮垂て大家喚びねと同音則右より左より只音喚活とど

既而脈絶全身冷。又活くもあられが大家竟の聲を止めく。いふおせまり。とうち譚ふ代
 四郎頭を傾け。好々我又其術あり大江和子の別臨。事あん時の與ふと。分ちて咱
 等も預けぬ。姫神傳授の神菜あふ在り。定業涯のありとも。一番其死を回して必活
 工の是世に死した仙丹。てこのいも。要の吊る茶龍を遠く。會ふ。軀て件の
 仙丹を少許分ち。妙の口の中へ。程に紀三六を走出。石滴を掬ひて共侶亦其口
 に入れて。胸を擁聲を合して。亦復嚔と半响許。左右も程小件の妙も脈出全身
 回陽り。駭く如く忽然と眼を閉死息を吻く。衆人を左見右見。什麻汝達。何人を
 と。よ。い。う。ま。か。て。を。と。め。こ。こ。ろ。の。い。う。の。う。れ。く。これと云ふ
 と。向ふ代四郎先答て。少婦人心の慥。我。我。們。は。是。別。人。を。も。安。房。の。里。見。の。使。臣。大
 江親兵衛の伴當。主の先途逢ん。今宵這山を登り。い。ま。ま。王。の。ま。ま。逢。せ。し。て。
 死身の死せ。見るふ忍び。幸い。腰。帶。起。死。回。陽。の。神。菜。を。即。効。ふ。お。お。び
 あり。と。告。げ。紀。三。六。語。を。續。て。猜。ま。ふ。死。身。は。是。西。陣。の。管。領。家。の。令。愛。那。雪。吹。と。

喚れ。の。小。姐。を。欲。非。欲。我。推。量。不。違。は。那。惡。僧。の。豪。奪。せ。れ。事。の。難。義。我。が
 及び。き。ま。や。い。ふ。を。や。と。事。問。ふ。人。の。憑。く。又。恥。く。さ。答。難。く。涙。と。袂。拭。堰。め。寒。お
 推。量。せ。れ。如。く。奴。家。の。政。元。の。頓。鈴。女。兒。雪。吹。を。侍。ん。今。宵。枕。不。就。後。那。德。用。が
 潜。寄。り。の。筆。算。あ。り。這。個。の。櫃。の。容。ろ。て。ま。り。這。敗。堂。早。居。れ。更。も。西。個。の。景。泰
 法師。の。辱。め。不。斷。迫。り。難。義。不。術。の。一。折。忽。然。と。出。來。ぬ。大。虫。の。德。用。堅。削。の
 脚。を。嚙。き。血。塗。れ。て。死。活。も。知。さ。ぬ。奴。家。も。俱。胸。決。け。開。く。儘。息。や。絶。け。ん。介
 後の。め。を。覚。む。抑。這。里。の。孰。の。山。を。現。再。生。の。恩。人。の。汝。達。の。姓。名。何。と。い。ふ。ん。听。ま。は。し。願。ふ
 館。へ。還。さ。れ。ぬ。大。人。の。軟。い。の。ゆ。え。身。の。上。の。幸。ひ。を。い。う。と。他。事。も。な。詞。の。露。ふ
 先。も。て。脆。死。の。袖。玉。を。散。る。淚。然。と。代。四。郎。の。听。ゆ。徐。小。慰。め。り。原。來。推。量。差。さ。ら。け。ぬ。
 那。姬。上。也。御。座。せ。よ。小。可。們。の。兵。數。を。ね。ど。任。稟。ま。し。姥。雪。代。四。郎。與。保。又。足。る。直。塚
 紀。三。六。甲。乙。共。七。名。過。ひ。は。皆。是。大。江。親。兵。衛。の。從。者。安。房。の。稻。村。より。註。語。の。一。伴

那猛獸と搏ゆんや只命運を自然に任して姑且 這里に便に達のかへるをぬき待て
 今の大事に姫上不在り身を思へん人も思ふ倘又途に非常の事必りとて去るべし
 語に云僧作魂を入まざるやうに勞して功をたるとして主さへ面伏するものあり後悔
 まとも及んや枉て三人を俱にぬきと連り不薦めて已され代四郎竟に這議を容て敢
 又他事は速に夥兵們の向ひて汝も目今するが如しを先左せよ右ねと言邊
 指揮し又雪吹姫の身邊に造りて恭しく稟けり不慮の御伴でいへ轎に准
 備のほどを御窮屈多かれども復に這般若棍小駕の御館へ還しなむ
 路と厭へはもる遙々館へ送りて是れ稀る心操感ざる猶餘のあり汝もの主
 る飲那大江とやら忠信義勇の崖略へ人の噂も隠れも一開き從事甚だ汝も
 義侠徳をあらわれと今更思ひ合へり是れ就くも憎むべし那徳用と堅削

多し他們の館に俗縁あり素是恩顧の者ありあれは清白持戒の男僧と云
 志の似ざるける今宵の淫悪破戒を斬の業報靦面目暴虎小喫れく脚を喪ひ
 あり現天四訓をあらむ館に是等の顛末を述べ汝も賞禄の異日の
 沙汰ありむ先きのうとあらるてと答ぬを代四郎の咄も因果を眼を睜り否小可
 毎に下司でいへも得ると見く義を思ふと云教と守る本性るれば御賞禄を願
 かの口のみ月来親兵衛が管領様と云小宗なり一報恩の一條中も有りぬと思召
 する飲ひの上をいへとくむせのいひと薦る程に兩個の夥兵を携来ぬ隊列卒
 繩を般若棍小膝着け吊緒さへ執拵へ捍棒二條を合し是を杖小代々卒と軀
 卑寄され一個の夥兵を蕉火二把を分ち合り背小ある其一把火を燃して左小
 捍棒を突建て外に立て待て在り當下代四郎と紀二六も雪吹姫を杖駕りて敢又
 其蓋をせも兩個の夥兵を見えて這敗堂の縁頼より拵下りし両肩入れて徐に昇りて



八坂通に輝堂三十九

十五

大徳堂藏



諸惡勿作 衆善奉行

八坂通に輝堂三十九

大徳堂藏

程一個の夥兵を蕉火を振照し先小代四郎も捍棒を突鳴し引添之
 西陣を投ぐいそせげり。小程不紀二六も送さる。兩個の夥兵と俱小雪吹姫を目送で
 果て。故処は退く時。肚裏も思ふ。姥雪叟の教も憑り。今這神茶を。徳用
 と堅削を活きとも。明々地。我名を告て大江主の伴當といひ。這奴もいふ。事の實を
 吐出さんや。要々あれと。尋思を。夥兵も固様々。と事情を耳に示せ。兩個の
 夥兵も。倒俯する。徳用と堅削の左右の腋も。挿入れ。耶と仰さぬ。掖起せ。二
 紀二六則。某籠る神茶と。聊々合ふ。這兩個の悪僧の口中。小放入。更亦石
 湯を掬び。伏飲ある。程も亦奇效時を移さ。徳用も堅削も。忽馬と
 我も復り。敢又脚の痛楚を。覺え。俱小紀二六。們を見。何と。什麼和王。那処の
 人。と訝り。向小紀二六。答て。長老達心地。甚麼い。面認。我。們。の。西。陣。の。館。の
 仕。走卒。其。甲。某。と。喚。る。者。身。達。の。逐。電。の。折。香。西。大。の

密意を。我黨二十餘名。八方へ部せ。死身も。趕鬼。中。咱。三
 名の。這。白。河。越。へ。と。差。向。ら。れ。て。來。け。れ。も。這。頭。の。那。暴。虎。の。害。怕。あ。り。殊。難。義。の
 大。役。も。貪。之。義。也。脱。る。路。も。か。そ。く。這。山。路。と。十。餘。町。登。り。來。ぬ。程。這。敗。堂。の
 頭。も。死。身。も。血。塗。れ。倒。俯。の。見。半。つ。ち。驚。死。喚。活。も。勸。り。も。氣。息。を
 けれ。術。あ。ら。ず。一。幸。し。て。我。懷。小。金。瘡。の。神。效。も。奇。某。あ。る。思。ひ。て。隨。即。是。を
 用。ひ。果。一。く。甦。生。の。歡。び。あ。り。世。間。昔。も。今。も。と。喪。ひ。脚。を。削。ら。せ。死。ぶ。る。者。さ。は。不
 わ。を。瘡。不。愈。る。何。う。あ。ん。命。の。芽。出。さ。ぬ。心。つ。思。ひ。ぬ。と。實。を。慰
 る。徳。用。听。け。點。頭。開。る。各。大。義。我。却。我。親。の。意。の。甚。麼。い。れ。ま。す。と。徳。用。も。一。と
 向。へ。紀。二。六。然。と。我。們。の。公。立。隊。追。隊。の。香。西。大。人。の。宣。甘。と。徳。用。も。一。と
 猛。可。の。亡。命。の。路。費。る。の。不。便。さ。ん。若。們。悄。地。の。趕。鬼。他。等。小。逢。り。這。金。を。遞
 與。て。其。投。方。へ。送。届。け。て。か。ら。來。る。又。只。悄。地。小。我。報。よ。然。る。時。宜。わ。我。必。若。們。を

執登く。互に職役と授金と仰らる。甲斐の逢ふの會も。身も。那虎の秋多と喫れ脚を断せ。投る。合く。あま。天も明。館より。鬼させ。真の追隊の這頭へ来る。争何の。見定。不便の。辯。儘。欺。堅削も共。侶。不。徳用。長老。這人々。是。我們。身。方。隱。徳用。然。那小姐の恙も。今も。猶。那。居。心。許。尚。那。其。頭。と。心。喃。人々。御。向。我。這。堂。内。一。個。の。妙。を。捉。籠。く。措。け。今。尚。那。其。頭。在。る。狄。甚。麼。を。と。向。へ。紀。二。六。頭。と。掉。く。否。然。る。人。無。無。と。い。ふ。兩。個。の。惡。僧。と。共。侶。不。歎。口。氣。し。て。噫。最。惜。也。那。小姐。も。亦。暴。虎。不。銜。去。れ。今。の。屎。也。ぞ。不。けん。悼。む。ぞ。と。軟。頭。く。默。然。る。姑。且。く。徳。用。へ。又。紀。二。六。を。見。る。喃。人々。左。て。右。て。も。我。薄。命。事。の。秘。蹟。を。今。更。親。の。使。休。る。和。郎。們。の。隱。ま。其。山。崖。略。を。告。げ。聞。ね。り。我。の。那。里。見。の。使。者。を。大。江。奴。不。舊。怨。の。あ。所。以。不。屎。密。

懇。志。これ。も。館。を。改。元。し。鈍。も。那。奴。と。愛。し。て。我。言。を。信。容。ら。れ。刺。試。敷。の。折。那。奴。為。我。さ。不。覚。を。取。り。怒。の。我。不。齊。河。原。勤。役。の。頭。人。種。子。嶋。中。太。正。告。紀。内。鬼。平。五。景。紀。鞍。馬。海。傳。真。賢。を。敵。齋。經。緯。等。今。宵。悄。地。不。謀。合。多。俱。不。這。山。路。潛。入。只。那。大。江。小。獵。子。奴。を。思。ひ。の。隨。不。敷。果。し。て。我。の。這。徒。弟。堅。削。を。領。て。遠。く。東。走。り。と。逆。思。へ。堅。削。が。意。見。よ。り。雪。吹。姬。を。搔。攪。ひ。櫃。を。藏。し。て。走。り。躰。て。這。里。不。一。霎。時。鵝。在。り。程。冤。家。未。一。我。五。虎。の。勇。士。們。の。逢。ぎ。て。反。々。那。真。虎。不。撞。見。の。堅。削。が。准。備。の。火。銃。我。平。介。の。鍊。杖。も。逆。敷。の。不。甲。斐。の。不。不。駭。惱。さ。れ。朽。惜。く。も。俱。不。脚。を。喫。断。ま。り。氣。絶。や。ま。け。ん。余。後。の。我。も。あ。る。在。り。け。る。原。來。我。意。中。人。も。虎。不。銜。去。り。早。く。阪。本。赴。小。姐。の。惜。む。不。足。と。和。郎。等。猶。の。上。の。好。意。我。們。を。肩。不。引。被。く。早。く。阪。本。赴。に。悄。地。那。里。の。客。店。を。告。ぐ。預。置。て。立。か。り。我。親。不。約。莫。是。の。秘。事。を。

人傳るる報けよか。路費の奥不飽られる。金子幾許か知れぬも。ヨクもれ言ふくま
 色等分不して和郎等不取せん。馮心むくと請求ま。堅削由共侶小堂合して拵む。像
 紀三六等ふら向ひ。喃親方達今師父のりれ。ど。這頭真の追隊蒐ら。既ふ
 是脚る。鮮虫もる。輟る。今我門が。いふして免え。入。怒。京師。牽。戻。されて。縛。頭。を
 敷。も。う。とも。和。主。等。不。何。の。益。あ。ん。猶。俠。氣。を。り。と。我。門。を。阪。本。へ。送。り。あ。ん。山。割。と。い。は。し
 た。金。子。の。和。主。の。懐。あ。る。る。と。名。恣。觀。面。る。利。得。い。あ。う。と。い。く。と。詩。復。ま。紀。二
 六。等。冷。笑。ひ。く。烏。嶺。へ。這。惡。僧。等。が。非。道。の。本。性。さ。も。あ。る。我。豈。香。西。復。六。の。鬼。さ
 る。使。の。走。卒。る。ん。や。実。に。里。見。家。の。使。者。る。け。の。蚤。崎。十。一。郎。照。文。の。伴。當。を。直。塚。紀
 二。六。即。是。へ。曩。お。犬。江。王。の。密。意。お。よ。る。京。を。別。店。お。潜。ひ。居。り。又。那。姥。雪。代。四
 郎。の。里。見。恩。顧。の。家。臣。な。れ。も。假。お。犬。江。の。伴。當。と。稱。做。し。其。毎。と。共。侶。小。三。條。を
 客。店。お。在。り。し。今。日。犬。江。王。の。虎。獵。の。事。お。さ。る。今。宵。の。先。途。お。逢。ま。く。欲。さ。る。姥

雪並お我黨志ある者都々七名情地お這山路おあついま。主お逢まきて若們
 が這処より脚を喪ふく。おと。又。那。一。個。の。麗。人。の。布。囊。を。銜。せ。れ。死。と。堂
 内。お。在。り。し。見。お。し。う。ち。も。置。置。と。神。某。と。り。先。其。麗。人。を。甦。生。ら。せ。事。の。仔。細。を
 諮。問。ひ。し。其。麗。人。の。西。陣。を。管。領。左。京。兆。の。親。女。是。則。雪。吹。小。姐。也。若。們。が。竊
 出。去。し。兇。惡。の。事。の。趣。其。山。崖。を。穿。り。知。り。し。姥。雪。の。五。個。の。伴。の。夥。兵。を。二。名。從。へ。く
 雪。吹。小。姐。を。西。陣。を。館。へ。と。送。り。お。れ。あ。き。我。の。亦。若。們。お。今。宵。一。重。要。時。命。を。借。し。て
 做。る。惡。事。と。す。く。爲。お。又。神。某。の。奇。效。を。り。と。の。お。工。を。お。し。し。ま。も。胡。意
 真。の。姓。名。を。告。ぐ。と。德。用。が。親。香。西。の。密。使。と。す。欺。け。お。若。們。鈍。く。も。謀。ら。ま。と。那。五
 個。の。猛。者。を。幫。助。と。て。犬。江。王。を。害。せ。んと。欲。さ。し。よ。さ。口。走。り。一。爾。お。出。て。爾。お。返。言。足
 天。罰。の。致。ま。所。從。て。も。思。合。せ。ま。我。の。曩。お。左。右。川。の。役。も。蚤。崎。の。伴。當。多。り。お。能。化。の
 敗。院。お。在。り。し。時。既。お。若。們。を。認。る。の。ら。那。時。正。可。お。面。を。對。し。て。の。ら。と。あ。る。今。の。亦。夜

視るれば若們心づらざり。身家の人心と思ひの笑ふ堪はる白徒る哉憎むべしと
 言委まらる鮮懲せし兩個の夥兵を拍を拍と俱々呵々とも笑ひけは然る徳用堅
 削今之の言とせし果む且敷馬に且怒り堪はる脚の大傷復疼むと才忍
 と堪難る眼と瞪し歯を切り。原来隘見分りとの悟と欺れる悔しや。抗拘で
 せんど。罵りるが共侶。身を起さず欲まを。紀三六を脚を飛くと甲乙一度ふ
 蹴仆せ吐嗟と叫びて蠢く。喘だぐ起ゆる。紀三六を。と冷笑ひ。後
 方立し。兩個の夥兵を。又思ひね野緒豺狼。那身を獵前。傷らして。尚
 尚人を咬ふ勢あり。這徳用堅削が。獲雄る。且力の。忽か。谷ら。這
 悪僧。其頭の樹榦。膝着く。姥雪。の。閑。成。谷
 も今。徳用が謀。合せ。河原の勤役正告。景紀真賢。経緯。四個の猛者の
 を思。大江主の上。愈危。酒家。又剛才。来る。舊の山路。主を。幸ひ。

適も逢る。是の椿事と。主報。一臂の補助。欲。を。玉
 ひと。論。夥兵。異議。寔。介。の。徳用。堅削。を。左右
 まで。掖起。列卒。繩を。繫。其頭。植。巨樹の榦。寄。勤
 も。敷。徳用。堅削。の。氣力。既。衰。只。身。の。苦痛。堪。阿谷。と
 多。在。り。兩個の。夥兵。を。笑。何。物。の本。を見。出家。者。女人の
 も。授。受。り。と。五。百。生。の。其。間。者。生。と。説。經。文。宣。以。は。這
 兩個の。悪僧。言。茶。虚。の。類。稀。恩。顧。の。檀。那。の。小。嬢。子。と。縛。縛。は。這。頭。
 遠。く。走。り。業。報。の。来。世。を。待。其。夜。の中。那。虎。其。羊。體。を。傷。ら。て。
 生。を。易。む。者。脚。を。做。ら。け。神。明。佛。陀。の。宜。訓。を。人。を。知。し
 ね。並。て。世。の。破。戒。和。尚。の。鍼。砭。を。紀。三。六。腰。吊。草。鞋。を。含。出。て
 敗。を。脱。垂。て。處。く。穿。易。て。鎗。を。含。肩。し。兩。個。の。夥。兵。を。對。ひ。介

あな一霎時別れてん其悪僧等左を右をれ出没不測の暴虎あり小心せむあべつ
らた這頭の諸木の枯枝あらん通宵焼明してななる由断をたぬいとくひの夥
兵も點頭く開も既ふらぬらら咱毎ち和殿を山路の小心緊要なれといふを紀
二六歩捨て然つがととなり蕉火を乗りり踵を旋り々北白河のへいを死けり
話分両頭よの日大江親兵衛の途に紀二六別をよるを儘馬の脚極を早
り。躬て宿所から送りぬ隸られる兩個の青侍を勞ひて返去あて却
宿所の隸若黨那名馬走帆を指示して這馬の箇様々々と思賜のりそ
告知ら宜く勤りぬと若黨則あらぬて奴隸毎ハ吩咐まぬ奴隸毎時を移
さる馬を背門不牽人そ秣を飼を方程親兵衛の徐やくふ毎小居る坐席をか
り坐して那兩個の堂管を召く面談せま思ふ折もよく堂管等ハ親兵衛が
今宵白河山から登りて虎獵をこの事の趣を知らせ早くもあふ来ふけれ

親兵衛隨即兩個の堂管對面し御向管領家の懇命辭ふ由を那
虎對治の事情を告むば堂管答ていさす其義の方僅有司より傳へられて
いハ都てあらぬいハ虎獵の弓箭銃砲の餘も欲りの器械あらん何まれ
準備を取せんとあつ下知はれぬれ美りのいハ仰せさせぬといふを親兵衛うち
ゆり開も承くいハも我山獵の身單るふ東西よりん反て要る只良弓一
張と獵箭十二條ゆく足れりとまよの餘ハ豆草一囊と乾飯一盒子を準備して
あるべしを中前前聊好とあり十二條の内中十條の箭の皆其鏃を抜き去る
代るハ形状粉團の如く木丸をのりてまよの弓も角弓を好とせぬの毛を馮心と
ゆりものとふ堂管等もあらぬて遠く退ら約莫一晌許ありて兩個の堂管
復来て親兵衛に報るを御向に誂へぬる獵弓獵箭を準備仕りぬといひ後
方とるるつとやくと喚立ると則兩個の隸若黨件の弓箭矢箙まで執致して

のてまゆを一個の嘗管受合いさぎ。卒とて親兵衛が身息遠謀措けり。登時親
 兵衛の歎びを陳勞ちんろうひく。先其弓と合抗あひかたて素齋そしきして試ら又其箭前やを見る果いそく
 獵箭りやくせんの二條のそ其他の十箭の皆鏃やぶと抜去ひき代る木丸きのたまをりてある孰も是良
 工いのる不成なりともちりて都々意い稱なひり。謝あやして嘗管あひもふさう東西既あ整
 ひされ。這この暎あ日ひより我身わがみ單ひと中な馬うまを那山かのやま找あむべ。抑おさ這回このの虎獵とらの我存わが亡不定
 ろ。倘不幸たかちて虎とらの逢あい山やまを下くだる日ひみるあへく。又那虎かのとら値あふそも力足ちからと云命いのちを
 殞なさん。その各あ位ゐ云いわく。完い一いつ條じょうあり。這月このつき屬管あ領家りやうけの恩賜おんみの衣裳いさやう武器
 調度てうどの其折々の目録めいよを相添あひそへ。始はじめりて各位あ位ゐ閉しり。あせされ。今いまるやあらん
 我命運わがめいを思量しやうりやうまへ。今いまゆ用もちる所ところ。因よ返かへり。なましく欲ほを異日あ宜よろく。あのみと
 夢え上あられん。と願ねがふのそ。とを嘗管あひもさう。ちやう其義そのぎあち。ゆるい。君きみが武ぶ執しの
 五虎ごこも及びあむ。出沒しゅつぼつ不測ふそくの变化へんげん。と。今いま獵ある所ところの一虎ひととらの。今いま嘗管あ對治たいぢの大功たいこうあり

ら。前の賜たまふ弥増やさて安房あへ齋いぬ。飲のる時ときの世よの常言じやうげん云いふ故郷こきやう飾か飾か
 錦にしきふそ。と詞ことば弁べんく慰なぐさまへ。親兵衛頭ちんべいゑうをうち掉おく。否いなと。我幸わがさいい。虎とらを對治たいぢの
 功成こうせいら。恩賞おんせうま身みの暇ひまをぬり。安房あへ還かへる。完い約やく束たあり。の餘あの千金せんざん廿萬にじゅうばん
 金の賜たまる。願ねがふ。明日あの必件かならずの一義ひとぎをすえ。と。那あの東あ西にし。宝庫たからへ返かへ
 納なめぬ。今いまの時とき分ぶんの。又また議ぎの要もとる。と。い。これ。嘗管あ官くわんも。強あい
 由よしる。今いま先浴まづあして夕饌ゆふせんふ就つぬ。ね。と。心こころで馳はり退ひり。後のち而して親兵衛ちんべいゑの謀ま
 僕わがの案内案内不儘ふじんして先浴室まづあ赴あり。徐ある湯浴ゆ。果はて。ちやう。末すえね。の。兩ふた個この若黨わかしやう給たま
 侍わかしやうして夕饌ゆふせんを差さへ。合あ合あ菜さいる。毎ま日ひの數かずを増ます。且かつ中酒ちゆうしゆの礼れいあり。嘗管あも。又また
 出いて。末すえて。不ふ盆ぼんを薦すすめ。む。と。既すでに。御ご食じき饌せん果くわから。親兵衛ちんべいゑの歎なげひを舒ゆる且かつ退ひり。
 身み壯さ衣いを救すくする。比ひ皆みな定ぢやう安房あより。衣い裳さうを。敢あて。京きやう樣やうの。新あの。肌あ膚くの。
 南蛮なんばん鍔つの鏢くさ衫しんと被か下くだ。同どう生な鍔つの細細こさい肌あ筋ぢん鍔つ打うち。脛すね衣いの。紐ひも向むかふ。縮ひ

做（し）上（う）中（ちゆう）を綾小菱の小袖水色湖袖の膝膊の小袖を下襲ふと縹纏純
 子（こ）の細縁（こ）の野袴（の）を下短（か）の穿（く）做（し）の姫神授與（し）の短刀（た）と小月形（し）の大（お）尻（し）鞋（か）
 被（ひ）の（し）を腰（こ）に跨（か）左袖（さ）を膝（か）卷（ま）の片袴（か）を襪（は）の射（し）の便（べ）宜（い）と背（せ）の
 矢服（や）の挿（さ）の（し）十（じゅう）有（ゆう）二條（に）の箭（や）を（し）高（たか）の駝（た）做（し）の頭（か）の銀（ぎん）の裏（うら）研（ぎん）の騎射（き）笠（かさ）を
 戴（たい）の脚（か）の麻織（あ）の戰鞋（せん）の緒（お）を結（む）ひて（し）明製（めい）衣（い）の角弓（かく）を握持（かく）の（し）打（うち）扮
 華美（か）る（し）を（し）勇士（ゆう）の氣象（き）凛然（りん）と人皆（ひと）悄地（せう）不感（ふ）下（か）けり（し）介程（け）大江親
 兵衛（べい）の身装（み）既（い）成（じやう）り（し）准備（じゆん）の乾飯（けん）を装（ま）る（し）盒子（こ）を右（みぎ）の（し）腰（こ）に吊（た）は
 堂（だう）管（くわん）若（じやく）堂（だう）の餘（よ）の隸僕（れい）小（せう）至（し）る（し）身邊（み）邊（へん）不在（ふ）在（ざい）る（し）比（ひ）皆（みな）別（べつ）を告（つ）て徐（じよ）外（がい）票
 立（た）出（し）れ（し）兩（りゆう）個（こ）の隸僕（れい）那（な）名（な）馬（ば）走（し）帆（はん）の飽（ほう）まで（し）豆（ま）草（そう）を喫（く）せ且（かつ）准備（じゆん）の秣（ま）一（いつ）臺（たい）を
 其（その）鞍（あ）下（か）吊（た）る（し）牽（けん）り（し）牛（う）と庭（にわ）在（あ）る（し）鞍（あ）鏡（か）比（ひ）皆（みな）初（はつ）の如（ごと）く欠（か）る（し）所（しよ）る（し）ける
 親（おん）兵衛（べい）今日（け）既（い）小（せう）郎（らう）中（ちゆう）騎馬（き）の免許（めん）を（し）憚（た）る（し）死（し）あ（あ）る（し）件（けん）の馬（ば）の（し）

の跨（か）る程（ほど）一個（い）の若（じやく）黨（だう）遠（えん）く馬（ば）上（じやう）張（ちやう）燈（てい）を（し）出（し）て是（こ）緊（きん）要（やう）の東西（し）を
 携（た）へ（し）の（し）と（し）の（し）躬（か）と（し）找（た）と（し）卒（そつ）と（し）叩（たた）く指（さ）を（し）親（おん）兵衛（べい）見（み）る（し）頭（か）を
 掉（た）く（し）今宵（け）の甲夜（け）閉（へい）へ（し）も咱（わ）の要（やう）と（し）辭（じ）と（し）躬（か）で片（か）鞆（た）を馬（ば）の
 鼻（は）梁（りやう）無（む）統（とう）ら（し）後門（ご）を投（な）げ（し）打（うち）れ（し）堂（だう）管（くわん）の庭（にわ）門（かど）小（せう）立（た）る（し）俱（く）是（こ）を
 送（おく）る（し）兩（りゆう）個（こ）の若（じやく）黨（だう）鐵（てつ）操（そう）の奴（やつ）隸（れい）後門（ご）を（し）出（し）送（おく）る（し）門（かど）子（こ）の木牌（もく）を遞（た）與（た）て
 下知（げ）の恒（こ）る（し）ぬを告（つ）ぐ騎馬（き）の出入（し）障（さう）の（し）當（たう）下（か）若（じやく）黨（だう）隸僕（れい）
 們（ら）の親（おん）兵衛（べい）の日（に）屬（じやく）心（しん）長（ちやう）閑（かん）け（し）好意（こう）淡（たん）く（し）思（おも）へ（し）有（あ）殺（ころ）す（し）別（べつ）を
 惜（お）ぬ（し）現（げん）十（じゅう）萬（まん）の敵（てき）を逆（さか）く人（ひと）先（ま）ちで鎧（よろい）を（し）入（い）る（し）易（やす）く今（け）身（み）單（だん）を
 那（な）屈（くつ）柔（じゆう）虎（こ）を對（たい）治（ち）の大功（たい）あ（あ）る（し）最（さい）難（なん）と（し）情（じやう）語（ご）且（かつ）占（せん）と（し）其（その）背
 影（かげ）の（し）退（たい）難（なん）と（し）惘（わう）然（ぜん）と（し）介程（け）大江親（け）兵衛（べい）の徐（じよ）外（がい）票（ひょう）を（し）找（た）ぬ（し）白
 河山（か）を投（な）げ（し）程（ほど）の（し）十（じゅう）町（ちやう）不（ふ）足（そく）ら（し）七日（しち）の既（い）小（せう）郎（らう）没（ぼつ）果（くわ）の黒（くろ）白（はく）別（べつ）ぬ（し）烏（くわ）夜（や）を（し）

懐在る那仁字の灵玉の車十五乘を照らすと云々。唐山下和壁も優
 去向幾許り照らす。非や神の真助不知案内。山路入りも敢迷を
 時ハ代四郎們が二條を。歇店と辭し去ると然るに遅速を。路里亦
 れ逢さけり。然ハ親兵衛ハ這宵初更の比及。白河の山脚へ來り。腰藪あ
 馬の足搔不任と。馳てうち登る。白河の里を稍過。右往左往路の九
 折る。嶮岨を厭む。冬の夜漸々深也。隨ハ萬籟聲。鐵々と流る。溪
 水の音もる。山回る。沙石茸々たる。荆棘皆是馬蹄を惱しく。路去り。水
 多る。樹間と漏る。星光の時。る。螢不わ。面を拂ふ。夜の山風ハ鋭。長
 膝九中勝る。或ハ樹枝交る。処鞍伏され。竹草を大奪れ。或ハ落葉の積
 処也。音あり。水を渡る。似たり。既ハ丑時分。至。八月。山峽を離れて。霜の
 厚さを覺え。影ハ。谷ハ。限あり。夜の深さを。知る。向。れ。青。壁。千。仞。身。白。雲。

横り。野婆の帽子と疑れ直下。深谷幽静。葛藤の長る。目路の
 棧。怪。山又。山を巡り。親兵衛一。時。馬を駐め。四下。見。之。れ。の
 地圖。據りて。逆知る。是。在。昔。法。勝。寺。の。執行。俊。寛。僧。都。が。山。莊。あり。処
 當時。那。俊。寛。們。が。後。白。河。太。上。天。皇。の。奉。為。平。家。を。討。ん。と。異。身。同。意。の
 毎。を。其。山。莊。招。會。々。情。々。地。相。謀。り。と。云。故。事。は。後。人。則。々。名。け。喚。て
 談。合。谷。と。云。え。け。り。并。左。も。右。も。あ。れ。我。通。宵。山。巡。り。て。既。不。曉。天。不。及。今。ま
 で。虎。不。遇。さ。る。命。運。茲。ハ。薄。く。故。御。へ。還。る。日。も。不。然。然。る。由。も。我。兩。館。れ
 威。福。を。戴。り。姫。神。擁。護。の。真。助。を。仰。ぐ。我。忠。信。の。由。り。の。伏。せ。安。を。已。へ。た。と。獨
 語。々。憶。む。も。嗟。嘆。不。堪。ね。憫。然。る。浩。処。不。風。吹。あ。る。前。面。不。草。取。立。枯。草。の
 偃。ま。如。く。と。戰。と。と。駭。に。け。ん。馬。ハ。猛。可。嘯。に。狂。を。親。兵。衛。楚。と。乘。駐。め。て
 物。を。あ。ら。と。夫。服。を。獵。箭。二。條。抽。合。り。左。も。右。角。弓。扱。と。眼。を。配。る。馬。上。の。身

構其処ともうぬ那時速一猛虎の一聲凄しく峯と振一谷响ひて突然として
 走り出する毛屬の別物るも回でもあは那暴虎牙を鳴り爪を張る眼の光り
 人を射て面も掉らむ親兵衛が乗る馬の後脚を噬付さんと跳り蒐る親兵衛早
 く馬を飛して縦横を身小馳輪らる馬上の自由へゆく馬も名不負ふ走帆の順風を
 ゆる小異なるも虎の束ぬるも未然不知て駭怕れ初小似ぞ進退奔走主の隨意
 中獲りて臥石より岨の印底葛藤敏系松柏中歩を駐め跌くび虎のゆく
 焦燥ち哮りて只管馳ま欲されも勢い便宜とゆらけり定や元人羅貫中が水
 岸傳ひつとあり虎の人を馳んとする小倘諺とゆらると西二番及ぶ時敢又容易く
 せも聊其身を退して更便宜と現ふ者と然れども今這虎も親兵衛が乗る馬
 馬を馳倒ま欲まると幾番あつ及び小人馬の進退至妙なり其便りをゆらけり勢
 ひ挽も近つゆらむ其頭小老る赤松の周匝十圍餘るあり則ち樹小身と寓て

背を高く一頭を低れ又其便宜を待つ程親兵衛の相距離ると既中て七八間早
 く馬を騎居て弓は箭刺ふ程もあせ虎の隄地頭を拾は走蒐るんとあはる處を能
 彎り固めく漂と射る善射の弓勢矢局錯る虎の左の眼を射らる鏃あまると赤
 松の幹四五寸射入り虎の一聲高く哮り其箭を抜を拵れ處を親兵衛
 透さむ二の箭を發して又只虎の右の眼を樹幹逼て申ける倅て虎と両眼
 共射られて其窮所堪ね立地衰果て才小其尾を動まも親兵衛は是を見てゆ
 たり馬より下立ち走り近つる右の拳を握固る虎の眉間を三四礮と搏り李廣が弓勢馮
 婦が勅力両るるゆらけ勇士は勝る由る虎の脳骨砕け皮陥りて軟々と斃れり

第百四十五回 親兵衛湖上の三関を破る

登時大江親兵衛の斃れを見て短刀小挿る刀子を抜出合直ぐ



八木傳九郎

九五

神前差あせんしの
 虎妖こまろ
 對治たいぢせうせう



八木傳九郎

九五

虎の隻耳を研合々々懐の楚と夾ぬ刀子を鞘に挿入れて始々後方より名馬
 走帆い走らぬ去るで舊処に在りし合笑々々から来て馬の額を拍り云々這馬
 進退駿足るまゝ我豈輒く成さぬらん。曩我老侯の賜りし青海波の優る
 とも劣るまゝに今宵の掙に実功を分つ小足も賞まべりと稱えく馳て其邊
 樹下小繫糸々時月を燭西下と觀る小臼の像々回る天然石わりければ是究
 竟と掖起し馬邊へ推居て鞍下る事裏と解く。豆草と件の四石小々容
 して馬小留し且馬柄杓も石湯を汲て又只水と喫あて我身別石小尻に抵
 姑且憩ひ居る程小左なる樹間より蕉火炊鬼燐火隱々として遙か見當る
 親兵衛心小訝りし。うち向ひて在りける既や近つぬ其火光も猶々これ
 是則一個の人左も尖鎗を携へ右も蕉火を振照し面鏡紀二六の宵より
 親兵衛早く聲と被て開直塚小わらわると問ひ答て然と云聲ゆる共走り來り

親兵衛を見く。合笑々々。あゝ大江君恙ままも那暴虎の甚麻を。と問ひ親兵
 衛否別義も。その後小を解示さぬ徳山路の夜と犯と和郎只一個來りける
 故とあつぬ。いと問復されて然し徳向姥雪叟へ御教諭を。告知るわらわらも尚
 已と云はる。その故箇様々々とか折代四郎と商置して伴若黨と叔謀との
 皆阪本の方へと牛遣。代四郎と紀二六と親兵衛五名の先途小逢んと。這山路小
 來ぬ。又徳用堅削の。又雪吹姫の事且其死を救ひ。又徳用が謀合し。と
 云五虎の猛者の。首より尾まで送る報て。又いさ。姥雪叟の那小姐と郎へ送り
 返さん。親兵衛三名に従へ。昇りて西陣へ赴ぬ。小可。那徳用堅削を結紐
 下。樹下小繫糸。則兩個の親兵衛守り。猶且那五虎の寇做さ。を
 早く和君小告。欲し。不這身單の危を見え。亦復索。來りける。幸ひ
 多く今。逢ま。りて。嬉し。けれ。那兩個の悪僧の天訓像の如く。後易し。

似れども尚五虎の大敵あり。只小心して願一けれといふを親兵衛らちきく。姥雪
 並和郎の相計い今宵の進退極く好那徳用者ぞ奸虐る。我ハ雖言做と
 誅といひつべし。矧又五虎の虚名を高き正告真賢経緯們が祖敷き
 計るとも怕るふ足る者る。先他を見よか。といひつ途前面る。樹下小指を
 紀三六と訝りる。又蕉火を振照し。其樹下立寄る。とこれハ那暴虎る
 へ。金毛白額世ある画圖の虎彪似る一隻の猛獸左右の眼と其樹の
 幹へ射串れて斃せり。在り紀三六の光景胆を渡し。聲慌く。是ハ甚麼
 とさうの不憶さ。も兩三歩。途巡し。又近づく。左さる右さる得と觀。且歎。且
 感。感ること大く。さる。舊處か。る。來て跪。跪。恭。親兵衛。う。ち。向。ひ。て。果
 甘哉和君の神箭射て斃され。那虎をむ其折の為体然。と。思。ふ。尚

減。く。具。示。一。の。ひ。と。回。ハ。親。兵。衛。然。と。我。亦。這。山。路。と。甲。夜。も。那。這
 と。求。獵。す。小。虎。の。在。處。を。知。り。も。憶。ど。方。僅。這。地。方。と。對。治。の。微。功。辱
 か。思。ひ。の。隨。射。て。斃。せ。併。我。武。藝。の。よ。く。致。と。所。あ。正。是。我。兩。館。の。威
 福。る。と。且。姫。神。の。眞。助。も。一。と。輒。々。死。事。を。む。然。ハ。七。這。馬。の。走。帆。と。名。け
 られ。政。元。主。の。愛。物。を。一。と。今。朝。も。咱。筆。ふ。さ。せ。ぬ。恨。れ。が。押。る。馬。を。不
 奔。蹄。神。速。我。意。小。稱。と。虎。を。近。つ。け。り。一。と。思。ふ。矢。局。を。射。る。と。は。其
 折。の。為。体。ハ。箇。様。々。と。悠。々。と。言。詳。小。あ。く。又。い。か。う。意。不。我。馬。の。自。由。を
 亦。亦。姫。神。の。眞。助。も。一。と。我。始。より。主。張。あり。那。虎。ハ。眞。虎。も。一。と。素。是。巨。勢
 金。岡。が。神。筆。や。胡。意。其。瞳。子。を。點。せ。ざ。り。一。と。衛。向。は。政。元。主。の。生。賢。也。其。馬。の。券
 主。異。風。不。強。て。其。虎。の。目。子。を。點。せ。り。め。け。る。ふ。と。其。画。虎。忽。地。不。脱。出。て。世。を。恐。虎
 不。至。れ。も。獵。戸。も。京。家。の。武。士。も。一。と。箭。鏃。砲。其。甲。斐。あ。る。と。功。る。と。一。と。思

なる故るん。夙くも心つた。我の虎の眼を射る。既ゆく那虎の両眼共。此
 深く射られて。その目子を喪ひ。立地不敵死れ。然れども。那箭を抜く。忽地其
 原幅より入り。とあるべし。と思ふより。箭を抜き。人を見せ。後まの證據。せ
 多く欲まるの。徳而今再思ふ。今番虎害不遇ける。諸人那巽風と。や。首を
 或の行客。武士獵戸。多く。是不良人。善人の其害。ある。一個も。これ。あ。世の
 風聲。不。せ。は。是。靈。虎。あ。暴。虐。の。唯。其。人。不。録。る。の。今。亦。亦。人。多。欲。我
 見て。敢。退。く。氣。色。を。只。音。不。馳。仆。して。害。せん。の。欲。あ。我。も。亦。人。多。欲。我
 生。平。不。ゆ。所。仁。義。忠。恕。の。外。の。は。欠。る。所。尚。有。る。欲。是。も。亦。我。撓。る。忠。心。を
 憐。れ。神。明。佛。陀。の。自。然。の。方。便。の。虎。は。猛。威。を。振。い。せ。我。不。射。せ。這。功
 の。故。御。へ。返。さ。せ。ぬ。ん。と。悟。れ。疑。ふ。り。も。我。始。より。徳。ま。不。思。ひ。ゆ。は。不
 あ。ね。ども。准。備。の。獵。箭。の。二。筋。の。其。餘。の。十。筋。の。鐵。を。棄。て。易。ろ。木。丸。を。り。

意。推。て。見。よ。山。幸。あり。虎。を。獵。る。時。我。矢。局。届。く。初。筋。前。二。の
 前。中。ら。非。如。幾。箭。を。射。ぬ。と。も。竟。お。の。甲。非。文。あ。る。と。る。け。ん。倘。亦。時。運。不。稱。い。系
 二。筋。多。く。足。さ。る。と。も。必。思。不。矢。局。を。射。んと。豫。深。念。を。あ。れ。ん。又。這。十。條。の。鐵。を
 抜。去。く。代。る。木。丸。を。り。せ。も。豫。よ。り。主。張。あり。徳。用。正。告。真。賢。直。道。景。紀。們。の
 那。身。武。藝。の。未。熟。と。思。つ。我。を。怨。る。と。り。あ。れ。ん。今。宵。の。山。獵。を
 ぞ。知。り。粗。敷。多。く。欲。まる。是。あ。る。べ。死。欲。さ。も。あ。れ。皆。射。く。付。て。微。生。ま。べ。あ。れ
 ども。那。僧。俗。の。皆。政。元。王。の。恩。顧。の。者。一。人。も。死。不。至。ふ。必。又。怨。を。送。し。て
 我。君。侯。の。見。為。不。宜。く。と。忌。憚。り。敢。殺。さ。ぬ。准。備。を。あ。る。果。し。て。他。們。の。徳
 用。の。薦。め。よ。り。て。力。を。勤。し。て。我。を。敷。多。く。欲。まる。欲。遮。莫。今。の。曉。天。不。速。ふ
 い。ま。他。們。は。逢。さ。る。他。們。が。商。量。一。致。せ。果。さ。る。故。不。て。徳。用。と。堅。削。の。果。敢。多
 虎。室。京。遇。る。む。と。心。の。秘。密。を。出。し。て。言。詳。解。示。其。紀。二。六。を。吹。く。と。毎。不

只感嘆の聲と断ぞ。听果く。吻と息をつれ。定ふ和君の神機妙算人意の
 表ふ出ざる者あり。至妙と稱えんも猶餘りあり。既小徳用堅削の死人ふ弁けられ
 患る。且御猜査小錯とせり。那五虎の毎ハ衆心速小一決せ。果さばやうふ
 以然りとも天の明るまで。小心せむあるべく。二箇所の関を踏め。小可御
 伴仕らむ。と云を親兵衛と申す。それ要らるふとと推禁め。天うち仰せ。今
 今ハ明る小程もあつ。我ハ幸崎阪本の新関を疾過り。且路次をいそいで。一日も早
 く。歸國せむ。欲まの。汝ハ天の明るまで。那虎の骸を守り。政元主の人來
 るとあふ。我意と示し。虎を遮與し。姥雪親兵衛共侶小徐。歸路と赴はね
 我既小虎を對治の幸あれ。政元主更小又我を留め。欲まるとも。言を設る。小
 由る。うん。姥雪並小汝等。入料ら。雪吹小姐の窮厄を。救ひ給。主僕
 一致の功を。汝等後より來ぬるとも。必障りあるべ。枉く。這議小儘。終と

諭其紀三六強る由。沈吟た。頭を拾け。念ふ左も右も仕らむ。今夜
 長は時候る。物欲く。其頭の準備小可。惣小敗堂。携へる。盒子。今ハ要ら。親兵衛。否。乾飯。准
 備あれども。開る。萬一の為。無とも。餓る。開を。何と。姫神授
 與の神茶。只病病。即效あり。窮と。飢。甚。折。聊。これ。腹。幾日。敢。餓。凍。千里。自由。奔馬。異。逆。示。教。兼。其。妙。試。今。番。必。神。茶。奇。效。憑。心。思。我。既。小。御。使。果。後。の。僞。居。宛。敵。地。不在。似。故。裏。情。地。小。姥。雪。意。衷。示。神。茶。分。與。申。斐。今。宵。料。雪。吹。小姐。必。死。救。我。與。光。増。幸。今。より。神。茶。奇。效。小。及。餓。凍。走。及。神。速。亦。可。と。解。諭。其。紀。三。六。愈。感。服。原。來。事。皆。姫。神。の。影。

立貌不添ふ。隈り守り守るの所以不危くも及々安く。如意なる所りも
 成さしある其數る。瓜小可もまて和君の伴小直れいと祈らる。那真助あり
 けぬ。さてもくと。なる不飲ひ涯のる。けり。當下親兵衛身を起し。馬の傍小立
 程。紀二六と遠く。絆を解く。鑢を合する。そのま待む。親兵衛弓の弦を口
 銜。馬小閃りとうち跨る。又紀二六を喚被く。や直塚和郎の姑且。小居よ。姥
 雪。更も我意を借へ。後より俱小来よか。と。紀二六心をあつ。其毛のるる
 ひぬ。噫や我りて来。是の鎧を争何ん。其推考をぬ。と。いへ。親兵衛頭を
 掉く。否。我身より箭あり。是の優る。案山子へ。鎧の汝推考へ。猶も其身の
 衛りふせよ。然る。と。むろふ心の鞆寛する。日本魂唐崎の関路を投く。徐々と
 馬の足撥を找めり。倭而大江親兵衛の紀二六は相別れ。湖水の方へ赴く。不談
 講谷今俗談合作るより。と。南辛崎又唐崎小作る。小届る。捷徑あり。と。豫聞け。も私徑中。且

其山路の嶮岨る。馬蹄と疲らま。と。わんと思へ。胡意遠きを戦つ。鉢伏大縣
 る。と。山里をうち過る。山中村は未ぬ。程。天の將小明ん。俗云。山中越りある
 る。このふの。と。新関あり。是を辛崎の関と唱ふ。より。南辛崎る。と。
 思へ。の。餘阪本大津。ゆ。新関あり。其。間。遠。り。む。這。三。関。の。と。く。相。構。へ。相
 共。小。輔。助。け。り。と。非。常。と。敬。言。ん。と。も。親。兵。衛。の。小。風。念。わ。り。東。海。道。の。大。津。の。外。小。其
 地。々。の。守。護。城。主。の。構。へ。る。新。関。を。不。言。う。ん。と。我。の。辛。崎。阪。本。より。路。を。志
 津。嶽。の。方。小。取。り。と。岐。嶺。より。安。房。へ。還。ん。と。豫。を。思。ひ。決。め。る。問。話。休。題。既。不
 あ。て。大。江。親。兵。衛。の。馬。を。早。め。と。件。の。関。小。近。つ。程。小。天。の。晴。や。小。明。更。り。と。茂。林。を
 離。る。鴉。の。聲。耳。還。途。は。ゆ。え。け。り。登。時。親。兵。衛。の。関。門。の。頭。中。則。馬。より。下。立。り
 馬。を。柳。下。小。敷。系。ぎ。身。單。門。内。小。找。と。入。り。と。守。屋。を。士。卒。小。向。ひ。と。い。や。う。晚。生。と。
 安。房。の。里。見。の。使。臣。大。江。親。兵。衛。仁。是。へ。今。番。室。町。殿。の。御。用。果。一。く。身。の。暇。を

賜^{たまは}す^を、いと^も死^にて^も歸^き、困^むせ^まく^に欲^ほま^す、去^りの^まを^も、票^ひし^と云^はす^に、卒^つ、門^め、これ^を、うち^も、守^り、隨^ま、即^ち、関^が、頭^の、人^を、不^ま、告^げ、る^に、が^ら、の^ち、地^の、関^が、今^も、老^を、松^を、湖^を、大^に、夫^を、惟^に、一^と、喚^を、做^を、者^を、烏^を、帽^を、子^を、素^を、袍^を、を^を、引^を、被^を、腰^に、刀^を、を^を、跨^を、便^を、面^を、を^を、食^を、り^を、端^を、近^を、く^に、出^を、て^を、來^を、る^に、對^を、面^を、あ^を、る^に、來^を、意^を、を^を、向^を、へ^を、が^ら、親^を、兵^を、衛^を、へ^を、憊^を、々^を、と^を、出^を、る^に、と^を、初^を、の^を、如^を、く^に、則^を、政^を、元^を、の^を、関^を、符^を、を^を、懷^を、よ^を、り^を、合^を、半^を、と^を、卒^を、と^を、と^を、速^を、與^を、其^を、惟^を、一^と、受^を、戴^を、せ^を、る^に、用^を、見^を、て^を、親^を、兵^を、衛^を、向^を、ひ^を、ら^を、る^に、今^を、の^を、御^を、下^を、知^を、ふ^を、憑^を、る^に、和^を、殿^を、那^を、暴^を、虎^を、を^を、正^を、可^を、對^を、治^を、ま^を、の^を、ひ^を、飲^を、と^を、向^を、ま^を、答^を、る^に、然^を、以^を、昨^を、宵^を、丑^を、三^を、の^を、時^を、候^を、る^に、談^を、講^を、谷^を、の^を、邊^を、あ^を、る^に、晚^を、生^を、那^を、虎^を、を^を、搗^を、ゆ^を、ら^を、其^を、兩^を、眼^を、を^を、射^を、り^を、斃^を、し^を、ら^を、折^を、の^を、光^を、景^を、の^を、箇^を、様^を、々^を、々^を、ふ^を、ひ^を、ひ^を、た^を、あ^を、れ^も、明^を、徴^を、を^を、け^れ、虎^を、の^を、隻^を、耳^を、を^を、所^を、合^を、て^を、懷^を、ふ^を、ら^を、る^に、是^を、見^を、ぬ^を、へ^を、と^を、の^を、ひ^を、つ^を、も^を、懷^を、を^を、搔^を、探^を、る^に、か^の、折^を、正^を、く^に、懷^を、紙^を、の^を、間^を、小^を、刺^を、入^を、ら^を、け^れ、小^を、那^を、耳^を、を^を、不^を、訝^を、す^に、左^を、右^を、の^を、袂^を、衣^を、領^を、の^を、間^を、を^を、那^を、這^を、と^を、撈^を、求^を、る^に、小^を、竟^を、は^を、あ^を、ら^を、る^に、一^と、く^に、親^を、兵^を、衛^を、眉^を、を^を、ち^を、擡^を、る^に、鈍^を、や^を、夜^を、の^を、山^を、路^を、を^を、喪^を、ひ^を、を^を、争^を、何^を、ハ^を、艾^を、緋^を、那^を、耳^を、あ^を、ら^を、る^に、射^を、り^を、斃^を、す^に

去^り、小^を、相^を、違^を、い^を、あ^を、ら^を、る^に、疑^を、く^に、思^を、れ^る、と^を、く^に、人^を、を^を、走^を、ら^す、と^を、談^を、講^を、谷^を、へ^を、遣^を、ら^る、と^を、斃^を、れ^る、と^を、去^り、虎^を、の^を、邊^を、あ^を、ら^る、我^を、伴^を、當^を、直^を、塚^を、紀^を、二^を、六^を、と^を、喚^を、做^を、ま^を、者^を、を^を、留^を、め^ら、ら^る、ち^を、守^を、せ^ら、る^に、と^を、く^に、命^を、と^を、其^を、人^を、を^を、那^を、里^を、へ^を、遣^を、ら^る、と^を、か^の、と^を、を^を、惟^を、一^と、呼^を、あ^を、ら^る、と^を、眼^を、を^を、睜^を、り^を、聲^を、并^を、立^を、て^を、开^を、け^ら、ら^る、と^を、勿^を、論^を、々^を、々^を、下^を、知^を、状^を、の^を、御^を、文^を、面^を、を^を、殺^を、し^を、所^を、の^を、虎^を、を^を、見^を、去^り、他^を、関^を、門^を、を^を、出^を、ま^を、く^に、去^り、と^を、許^を、ま^を、と^を、勿^を、れ^と、あ^を、と^を、憊^を、れ^ば、實^を、檢^を、使^を、を^を、遣^を、ら^る、と^を、事^を、の^を、虛^を、實^を、を^を、知^を、る^に、外^を、面^を、へ^を、退^を、れ^て、姑^を、且^を、等^を、ね^と、寤^を、れ^ば、関^の、走^を、卒^を、兩^を、三^を、名^を、親^を、兵^を、衛^を、を^を、推^を、立^を、ら^る、と^を、卒^を、と^を、馳^を、る^に、外^を、面^を、へ^を、出^を、て^を、門^を、戸^を、を^を、鎖^を、け^り、と^を、親^を、兵^を、衛^を、へ^を、今^を、惟^を、一^と、が^ら、ゆ^り、も^を、理^を、る^に、争^を、つ^を、む^に、舊^を、處^を、へ^を、退^を、れ^る、と^を、肚^を、裏^を、小^を、思^を、ふ^に、那^を、惟^を、一^と、狐^を、疑^を、る^に、一^と、旦^を、我^を、を^を、拒^を、む^に、と^を、斃^を、れ^ば、虎^を、の^を、那^を、里^を、へ^を、在^を、り^に、實^を、檢^を、の^を、者^を、か^ら、來^を、る^に、他^を、が^ら、疑^を、霧^を、と^を、共^を、馳^を、る^に、関^の、門^を、を^を、開^を、れ^ん、姑^を、且^を、あ^を、ら^る、と^を、魏^を、ひ^る、後^を、れ^て、來^を、ら^る、と^を、姥^を、雪^を、と^を、親^を、兵^を、衛^を、紀^を、二^を、六^を、を^を、俟^を、合^を、ま^を、す^に、倒^を、し^て、便^を、り^に、好^を、と^を、尋^を、思^を、を^を、去^り、柳^を、下^を、る^に、石^を、小^を、尻^を、を^を、搥^を、り^に、居^る、と^を、介^を、程^を、小^を、老^を、松^を、湖^を、大^を、夫^を、惟^を、一^と、士卒^を、兩^を、三^を、名^を、小^を、分^を、付^を、く^に、親^を、兵^を、衛^を、が^ら、昨^を、夜^を、談^を、講^を、谷^を、を^を、射^を、殺^を、ら^る、と^を、云^は、虎^を、を^を

今も存那里在るや。あはく虚実を檢せよとて遣せし。このみち。あせらら。素より小胆病者なれば。只得其山路不赴。程僅の三四町中。俱に樹蔭に立。在る。悄やくふ商量するや。那暴虎へ變化する。あふ二十は足らぬ。後生の武藝不捷。まごころとて。輒く射殺さる。兎獸あはくぞ。意ふ那大江とやら。計りて関を過ぐ。とて。伴りたるあはくぞ。と一個ぐいへ。皆點頭。然之其頭をより思つ。虚々と那里に到る時。反々虎不撞見。誰う免る者あらん。所詮あま時を殺して立久く。稟さえ。小可毎談講谷不赴。樹の下品の間も。隈なく索ひひ。死なぬ獸。免でも。是あををを。あはくは。是必大江とやら。伴誑。あはくをいひ。と報る。不價。まごころ。あはくぞ。とのあ初の一人も。それでよく。と応ふ。俱に雜談。胡意時を殺し。あはく。程。大江親兵衛へ。憊る伎倆を知るより。も。其実檢使のか。う。來ぬ。と。約。莫二時許。已牌近くる。あはく。心連り。あはく。焦燥。門を喚。催促する。あはく。只忘々。となら。

あはく。許さくもあはく。され。心悄地不疑。又関門。あはく。立。あはく。耳を傾。け息を。あはく。裏面の形勢を。あはく。視。あはく。馬。あはく。鞍措。あはく。鑢子の响。あはく。鎧の吊腿の音。あはく。さ。あはく。原。あはく。那。あはく。里。あはく。不。あはく。異。あはく。変。あはく。あり。あはく。我。あはく。を。あはく。捕。あはく。ん。あはく。與。あはく。る。あはく。飲。あはく。と。あはく。思。あはく。ふ。あはく。の。あはく。う。あはく。毫。あはく。も。あはく。諜。あはく。を。あはく。柳。あはく。下。あはく。の。あはく。又。あはく。退。あはく。て。あはく。解。あはく。捨。あはく。馬。あはく。の。あはく。う。あはく。ち。あはく。跨。あはく。り。あはく。箭。あはく。を。あはく。合。あはく。り。あはく。弓。あはく。を。あはく。挾。あはく。く。あはく。身。あはく。構。あはく。を。あはく。做。あはく。ま。あはく。程。あはく。も。あはく。あ。あはく。は。あはく。関。あはく。門。あはく。の。あはく。内。あはく。忽。あはく。焉。あはく。と。あはく。戰。あはく。鼓。あはく。の。あはく。音。あはく。響。あはく。く。あはく。門。あはく。戸。あはく。を。あはく。颯。あはく。と。あはく。ら。あはく。ち。あはく。啓。あはく。く。を。あはく。こ。あはく。の。あはく。本。あはく。関。あはく。の。あはく。頭。あはく。人。あはく。老。あはく。松。あはく。湖。あはく。大。あはく。丈。あはく。惟。あはく。一。あはく。鳥。あはく。草。あはく。絨。あはく。の。あはく。身。あはく。甲。あはく。の。あはく。段。あはく。々。あはく。肋。あはく。の。あはく。戰。あはく。袍。あはく。を。あはく。う。あはく。ち。あはく。披。あはく。り。あはく。腰。あはく。の。あはく。兩。あはく。刀。あはく。を。あはく。跨。あはく。へ。あはく。桃。あはく。花。あはく。馬。あはく。の。あはく。雲。あはく。珠。あはく。鞍。あはく。措。あはく。あ。あはく。ら。あはく。う。あはく。ち。あはく。騎。あはく。り。あはく。多。あはく。し。あはく。麻。あはく。毛。あはく。を。あはく。採。あはく。り。あはく。旗。あはく。を。あはく。進。あはく。せ。あはく。野。あはく。兵。あはく。一。あはく。百。あはく。二。あはく。三。あはく。十。あはく。名。あはく。を。あはく。前。あはく。後。あはく。左。あはく。右。あはく。不。あはく。從。あはく。せ。あはく。威。あはく。勢。あはく。猛。あはく。く。あはく。見。あはく。れ。あはく。出。あはく。ず。あはく。四。あはく。下。あはく。の。あはく。响。あはく。く。あはく。聲。あはく。高。あはく。や。あはく。あ。あはく。後。あはく。を。あはく。れ。あはく。大。あはく。江。あはく。親。あはく。兵。あはく。衛。あはく。我。あはく。既。あはく。不。あはく。隊。あはく。兵。あはく。を。あはく。談。あはく。講。あはく。谷。あはく。遣。あはく。し。あはく。虎。あはく。の。あはく。虚。あはく。実。あはく。を。あはく。檢。あはく。せ。あはく。し。あはく。那。あはく。里。あはく。の。あはく。相。あはく。似。あはく。し。あはく。山。あはく。貓。あはく。も。あはく。あ。あはく。は。あはく。と。あはく。る。あはく。意。あはく。ふ。あはく。爾。あはく。伴。あはく。誑。あはく。を。あはく。り。あはく。関。あはく。を。あはく。輒。あはく。く。あはく。う。あはく。ち。あはく。過。あはく。ぐ。あはく。逃。あはく。け。あはく。て。あはく。安。あはく。房。あはく。へ。あはく。還。あはく。ら。ん。あはく。と。あはく。欲。あはく。し。あはく。た。あはく。不。あはく。疑。あはく。い。あはく。る。あはく。介。あはく。ら。あはく。是。あはく。上。あはく。を。あはく。欺。あはく。は。あはく。し。あはく。罪。あはく。死。あはく。を。あはく。容。あはく。さ。る。あはく。儘。あはく。恥。あはく。見。あはく。る。あはく。あ。あはく。を。あはく。り。あはく。我。あはく。今。

雨を搦捕りて。將小京師へ献せんと。毛阪本大津の西関へも既小太の毛を通達
 せしむ。身を鵬鶴ふ做せ術あり。湖水を渉まあざらせ。一步も脱る路あり。
 其の毛を知らず。速小下馬して。索小被らば。とらせも果む親兵衛を。賑然と。ち
 笑ひ。身許へ。惟一慥小聞ね。那虎の直虎あ。素是名画の变化る。酒
 家小眼を射られ。原故の画幅小復り。秋その毛の。知ねども。那里中留
 置。我伴當紀二六あり。非如紀二六。去去り。那里小在。むる。ぬも。我射小
 獵箭二條。必那樹小在。る。死小开を。よ。索見。る。欲無。とい。の。回。い。で。も
 あり。是。実。檢。の。疎。忽。る。ん。小。我。を。外。る。甚。麼。を。我。の。本。性。信。義。を。旨。と。し。
 縦。背。臆。望。柳。の。歸。心。の。矢。の。如。く。ん。も。豈。唐。山。齊。の。田。文。敬。の。故。吏。小。儉。人。
 と。謀。り。て。今。這。関。を。踰。ん。や。我。既。小。虎。を。對。治。し。て。左。京。北。小。約。束。を。果。と。今
 這。地。を。過。る。若。們。反。く。狐。疑。し。て。一。個。の。行。客。小。物。々。あ。緝。捕。三。昧。を。做。さ。る。

ら。今。更。小。是。非。及。び。目。小。物。見。せ。ん。む。覚。期。を。せ。と。返。を。詞。を。半。分。も。听。さ。
 る。惟。一。怒。て。塵。を。り。鞍。の。前。輪。を。うち。敲。ら。る。あ。る。ら。母。を。捕。捕。れ。兵。每
 緩。と。吸。ま。み。端。雄。の。夥。兵。二。十。名。鉄。槍。又。又。を。打。振。ら。る。掖。落。さ。ん。を。競。
 小。鬼。を。親。兵。衛。と。く。ら。小。箭。刺。さ。る。敵。を。擇。む。射。す。小。其。箭。小。鐵。を。死。
 の。う。う。矢。接。壘。の。を。煨。煉。小。あ。る。れ。強。小。心。七。八。人。矢。場。小。檜。と。倒。し。け。り。這
 弓。勢。小。辟。易。し。て。找。難。る。勢。の中。へ。親。兵。衛。馬。を。衝。と。乗。入。れ。て。敵。の。又。又。を。掖。
 小。合。り。中。る。小。儘。し。て。打。散。を。勢。小。向。小。前。を。け。れ。夥。兵。を。ち。え。惟。一。も。駭。怕。れ。小。味。
 ぬ。も。馬。小。拍。を。逃。走。れ。去。向。小。出。來。る。一。隊。の。人。馬。是。則。別。人。る。と。毛。阪。本。の。関。に
 頭。人。根。古。下。厚。四。郎。鶴。宗。が。隊。兵。二。百。有。餘。を。領。り。惟。一。を。援。ん。と。馬。を。走。
 ら。東。ぬ。之。惟。一。是。小。力。を。引。返。し。揉。合。し。共。侶。小。親。兵。衛。を。搦。捕。ま。欲。せ。れ
 ぶ。も。親。兵。衛。の。物。と。も。せ。馬。を。縦。横。小。馳。西。し。敵。を。左。右。討。靡。け。て。活。を。死。に。挑。



大車九陣卷二九

廿四

大英堂藏



親兵衛
單騎
擊退
敵軍
令其
走避

大英堂藏

大英堂藏

む折忽地阪本の関の方へ猛火高く燃升と湖水の風を吹靡く煙這方へ沖りを
鳩宗を瞻仰す。原来裏伐の者ありて火を放ちるあり。兵毎半分の走りかへり。疾
滅止よと喚れ。兩隊の親兵驚慌し。扨擇せる者も多し。敵の多少を料り難く。阪
本へ還りしむ。大津を投て逃走す。鳩宗も惟一の逃る隊兵を誘引し。敗れし
路を逃る勢ひ已に尽るあり。親兵衛の逃るを迂り。那里までもとて。程大
津の関の頭人より。大杖意鬼入道給物。亦隊兵二百有餘を得て力を惟
一鳩宗を勸。其馬を早め。出て來りける其甲斐も。逃る身方。人辭打れ
一柱も柱のまじ。一團の類と謀ら。大津を投て退走るを親兵衛の敵の息も
類れ。難立々々。趕され。大津の関は破れ。畢竟大江親兵衛が二関を
ら破り。後の話説甚麼を。开ら。又下回解分るを聴ねか。

南總里見八犬傳第九輯卷之二十九終

